新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第二章（だいにしょう）　実践（じっせん）

如説修行（にょせつしゅぎょう）

仏滅度(ほとけめつど)して後(のち)、当世(とうせい)・末代悪世(まつだいあくせ)に法華経(ほけきょう)をありのままに能(よ)く説(と)かん、これを難(かた)しとすと説(と)かせ給(たま)えり。

（016 主師親御書(しゅししんごしょ)

如説修行(にょせつしゅぎょう)322ページー13行）

これを信(しん)じて一遍(いっぺん)も南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と申(もう)せば、法華経(ほけきょう)を覚(さと)って如法(にょほう)に一部(いちぶ)をよみ奉(たてまつ)るにてあるなり。十遍(じっぺん)は十部(じゅうぶ)、百遍(ひゃっぺん)は百部(ひゃくぶ)、千遍(せんべん)は千部(せんぶ)を如法(にょほう)によみ奉(たてまつ)るにてあるべきなり。かく信(しん)ずるを如説修行(にょせつしゅぎょう)の人(ひと)とは申(もう)すなり。

（019 十如是事(じゅうにょぜじ)

如説修行(にょせつしゅぎょう) 357ページ－5行）

詮ずるところ、仏法を修行せんには人の言を用いるべからず。ただ仰いで仏の金言をまぼるべきなり。

（036 如説修行抄

如説修行 601ページ-10行）

結局、仏法を修行するためには、（仏以外の）人の言葉を用いるべきではなく、大切なことは、仏がおっしゃったことだけを守るべきです。

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)る者(もの)は、
日蓮(にちれん)に違(たが)わずして宣説(せんぜつ)すべきなり。
（095 御義口伝(おんぎくでん)
如説修行(にょせつしゅぎょう)1038ページ-1行）

法華経（ほけきょう）は紙付（かみつ）きに音（こえ）をあげてよめども、彼（か）の経文（きょうもん）のごと
くふれまうことはかたく候（そうろう）か。
振舞難

（150 転重軽受法門（てんじゅうきょうじゅほうもん）
如説修行（にょせつしゅぎょう）1357ページー8行）

今、両人、微力を励まし、予が願に力を副え、仏の金言を試みよ。経文のごとくこれを行ぜんに徴無くんば、釈尊正直の経文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の舌相、有言無実とならんか。

（162 曽谷入道殿許御書 如説修行 1410ページ－5行）

今(いま)、末法当世(まっぽうとうせい)の有智(うち)・無智(むち)、在家(ざいけ)・出家(しゅっけ)、上下万人(じょうげばんにん)、この妙法蓮華経(みょうほうれんげきょう)を持(たも)って説(せつ)のごとく修行(しゅぎょう)せんに、あに仏果(ぶっか)を得(え)ざらんや。

（239 教行証御書(きょうぎょうしょうごしょ)

如説修行(にょせつしゅぎょう) 1676ページ-13行）

いよいよ信心をはげみ給うべし。仏法の道理を人に語らん者をば、男女僧尼必ずにくむべし。よしにくまばにくめ、法華経・釈迦仏・天台・妙楽・伝教・章安等の金言に身をまかすべし。「如説修行」の人とは、これなり。

（262 阿仏房尼御前御返事 如説修行 1730ページ－14行）

ますます信心を励んでいきなさい。仏法の道理を人に語ろうとする者を、謗法の男女や僧尼がかならず憎むことでしょう。憎むなら

憎(にく)むがよい、法華経(ほけきょう)・釈迦仏(しゃかぶつ)・天台大師(てんだいだいし)・妙楽大師(みょうらくだいし)・章安大師(しょうあんだいし)の金言(きんげん)に身(み)を任(まか)すべきです。如説修行(にょせつしゅぎょう)の人(ひと)とはこういう人(ひと)をいうのです。